

中之下字一陣の太平洋に面した砂丘上にあります。昭和 29 年 1 月 19 日、川添憲枝氏が土器片・獣骨片・鯨の椎骨などを発見したことにより、昭和 31 年 8 月、広田遺跡を発掘した盛園尚孝氏が中心となり、南種子高校生であった崎田宏、立石公、向井晃、岩坪澄人、野沢慎一、谷口隆利氏らが参加し、本格的な発掘調査が行われました。また、発掘の最終段階では、三友国五郎先生も調査に参加されています。

発掘調査の結果、この貝塚は縄文時代晩期（黒川式）の遺跡であることがわかりました。

出土品は、石斧・鹿や猪の歯・鯨の椎骨・海亀の上下顎骨・魚骨・土器等で、貝層に多くの貝類・獣骨・魚骨を含んでいて、ジュゴン製のかんざしも出土しています。また、この貝塚から出土した老人に近い男性の人骨に、風習的な抜歯の跡や人為的な水平研歯が施されていて、南島における縄文時代の抜歯風習を考える上で貴重な資料といえます。

平成 21 年には、南種子町教育委員会によって発掘調査がなされ、現地に遺跡が今も残っていることがわかりました。また、広田遺跡の人骨が身につけていたものと同じ貝輪（オオツタノハ貝輪）が出土しました。一陣長崎鼻貝塚遺跡は、広田遺跡より 1,000 年以上古い遺跡ですので、この貝輪は、種子島における最古の貝製装身具といえます。



昭和 31 年の発掘風景



平成 21 年の調査で出土した土器、獣骨